令和７年１月７日

研修だより 53 号

「非認知能力の必要性①」

小笠原康晃

前号の続きです。

「非認知能力」の育成は改めて言われるようになった理由は、かつての方法で「非認知能力」を育成できなくなったからだと、私は考えています。

以下、研修を受けた上での私の考えです。

「あきらめない力」「やり抜く力」といった非認知能力を、今まで学校は育ててこなかったのでしょうか。

全く違います。むしろ学校は「全人教育」という名の下で、学校で学力などの認知能力と非認知能力の２つを育てることが十分にできていました。

「あきらめない力」は学習の中で身に付けることもできます。

しかし、係や委員会、学校行事などの特別活動や水泳や陸上などの課外学習でも身に付けることができます。

今までの学校は学習と活動の２つで、非認知能力を育てることができました。

大人になってからも部活動での経験が社会生活で生きているという話はよく聞きます。

「部活動で陸上部の長距離走を６年間やっていた。長距離走はスタートしたら、走り続ければ必ずゴールに辿り着く。続けていくことが必ずゴールに繋がる。だから、私はそこで「あきらめない力」を学んだと思います。」

学校で行われていた課外活動は、非認知の能力の育成に大きく貢献していました。

また、学校行事などの特別活動も大変大きな影響を与えていました。

「すべては子どもたちのために」と先輩方が取り組んできた教育活動は、現在求められている非認知能力の育成に大きな影響を与えていました。